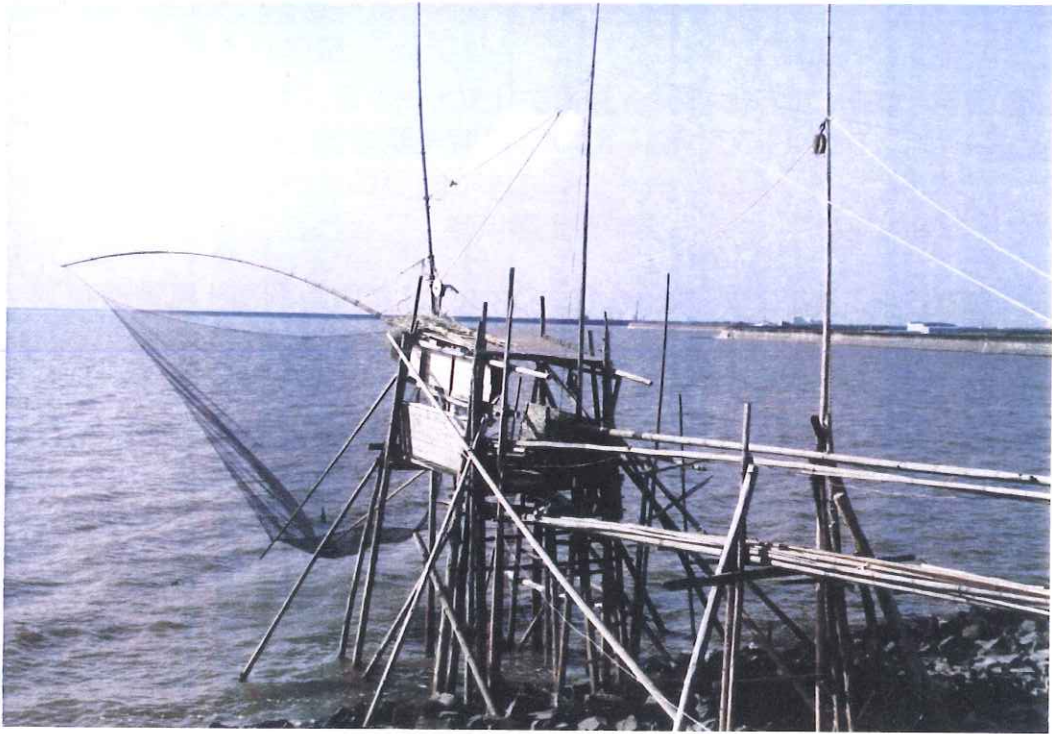


柳川郷土研究会
会誌「水郷」付録

すいきょう

瓦版

発行所 柳川郷土研究会
柳川市本城町 113-1
発行人 武松 豊
編集責任者 金子俊彦



土竜(もぐら)の唄き

一〇年程前に他界された森護会員の短歌に「学徒動員の鉢巻き姿のわれと友の命惜しまざりし写真も古りぬ」というのがある。その短歌から森さんが戦中派であることが判る。わが郷土研究会の中で、森さんと同世代の坂田・米多比・友清・甲木・小川の諸氏は既にこの世にはいない。傘寿を越すのは男にとつて大変であるらしい。「大正は遠くになりけり」と言いたくなる。振り返ると故人たちは、皆真面目で頑張り屋で協力的であった。今その世代で生きている者には、後期高齢者の名が冠せられている。内容はともかく、嫌な呼び名である。戦後の悲惨な状況のなかから懸命に働き、現在の繁栄に貢献した世代と思えばもつといいネーミングがあつてよかつたろうにと思う。今、老人には身体の問題とともに物価高の困難が襲ってきている。森さんの創句のなかに「へそぐりを又も家計に引戻し」というのがあるが、へそくりならぬ預金の引戻しとなりそうな時代となつた。その預金も、ただ同然の利息しかつかないために増えることもない。年寄りに冷たい国になつたと思う。しかし、私も老人だが弱音は吐かない。年寄りの強さと知恵の素晴らしさを見せようと考えている。頑張ろうぞエイ・エイ・オー。

(土竜)